

「慰安婦」問題とレイプ神話との関連

—男女の比較に焦点を当てて—

中野真希¹ 伊藤武彦² 井上孝代³

1 明治学院大学大学院心理学研究科 2 和光大学現代人間学部 3 明治学院大学心理学部

研究の概要

【「慰安婦」問題とは】

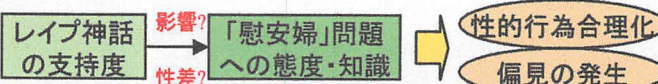
「慰安婦」問題とは、学者やNGOが被害者の代弁的な立場から発言し、旧日本軍による「慰安婦」の強制性はあったとする肯定派と、「慰安婦＝公娼」論的な主張をし、旧日本軍による強制性はなかったとする否定派の2つの対立軸がある(大沼, 2007)。一方で、慰安所を必要悪だとして肯定する旧軍人の考えの背後にある、女性を「もの」として考える意識があった(吉見, 1995)など、「慰安婦」問題において、**性的行為の合理化が起きていたことが示唆される。**

【レイプ神話とは】

こうした性的行為の合理化意識は「**レイプ神話**」(Burt, 1980)と呼ばれ、「**加害者を免責し、被害者の責任を問うものである**」と定義されている。レイプ神話が「慰安婦」問題に内在しているのなら、それにより歴史的事実の態度や知識が妨げられ、「慰安婦」問題が未だ解決されない要因の一つにもなっているのではないかと予想される。

【目的】

本研究では(1)レイプ神話がどれほど支持されているかと、(2)人々の「慰安婦」問題に関する態度や知識と、(2)の関連がどのようになっているかを、性差に着目して検討することを目的とする。



分析方法

レイプ神話の支持度と「慰安婦」問題への態度・知識を計測するためのアンケートを実施し、両者の関連性を分析

【対象者】

東京都内の男女大学生150名
(男性73名, 女性76名, 不明1名)に質問紙調査

【「慰安婦」問題に関する尺度】

北風(2008)による、「慰安婦」問題に関する尺度を利用

【レイプ神話尺度】

大淵他(1985)による、レイプ神話支持度を測定する尺度を利用 (測定項目:「暴力的性の容認」「女性の被強姦願望」「女性のスキ」「ねつ造」)

結果と考察

【レイプ神話の支持率と回答傾向】

- 「被強姦願望」: 男性のほうが正当化する傾向
- 「ねつ造」: 男女とも10%弱で支持する傾向
- 「女性のスキ」女性のほうが支持率が2倍以上高い結果
→ 無理やりされても仕方ない、自分の責任と考える傾向
→ 二次被害を防ぐためにも、教育的介入が必要不可欠

【「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係】

- 「慰安婦」問題を許さない態度とレイプ神話支持の得点: 負の相関 ($r=-.22, p<.01$)
- 「慰安婦」問題を許さない態度とねつ造支持の得点: 負の相関 ($r=-.19, p<.05$)
→ レイプ神話尺度の得点が低い(支持していない)人は「慰安婦」問題を許されることではないと考える傾向 (レイプ神話支持度は「慰安婦」問題への態度に関連)

【「慰安婦」問題に関する態度と知識】

- 正しい知識→問題を許されないとする態度: 正の相関 ($r=.58, p<.01$)
→ 「慰安婦」問題の正しい知識を身に付けている人は「慰安婦」問題を許してはいけないと考える傾向 (慰安婦)問題の正しい知識も独立して態度に関連)
→ 二次被害の予防や偏見の低減には、「慰安婦」問題とレイプ神話それぞれからの教育的介入が必要

各項目間の相関係数	「慰安婦」問題の認識	
	男性(N=72)	女性(N=77)
レイプ神話支持(合計得点)	-0.081	-.360**
暴力的性の容認	-0.016	-.301**
被強姦願望	-0.115	-0.146
女性のスキ	-0.012	-.227*
ねつ造	-0.121	-0.206
「慰安婦」問題の知識	.588**	.564**

(** $p<.01$, * $p<.05$)

【性差における「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係】

- 女性の場合: 負の相関が見られた ($r=-.36, p<.01$)
→ 平時におけるレイプと戦時におけるレイプ(「慰安婦問題)に対する支持、態度の傾向は変わらない
- 男性の場合: 有意な関係を示さなかった ($r=-.01, r=-.09$)
→ 平時におけるレイプと戦時におけるレイプ(「慰安婦問題)に対する支持、態度の傾向が異なる可能性
→ 男性は戦争等の戦時にはレイプを正当化する傾向が強い可能性があると考えられる(更なる分析が必要)
→ 男性に対する独立した教育的介入の必要性が示唆

参考文献

1. 北風菜穂子 2008 日本の大学生のレイプ神話受容態度と変容に関する臨床心理学的研究 明治学院大学大学院心理学研究科 修士論文
2. 大淵憲一 石毛博 山入端津由 井上和子 1985 レイプ神話と性犯罪 犯罪心理学研究, 23, 2, 1-12

「慰安婦」問題とレイプ神話との関連

—男女の比較に焦点を当てて—

○中野真希¹⁾ 伊藤武彦²⁾ 井上孝代³⁾

(¹⁾ 明治学院大学大学院心理学研究科 (²⁾ 和光大学 (³⁾ 明治学院大学)

キーワード: 「慰安婦」問題, レイプ神話, 性差

【研究の目的】 「慰安婦」問題は、学者や NGO が被害者の代弁的な立場から発言し、旧日本軍による「慰安婦」の強制性はあったとする肯定派と、「慰安婦=公娼」論的な主張をし、旧日本軍による強制性はなかったとする否定派の2つの対立軸がある(大沼, 2007)。一方で、慰安所を必要悪だとして肯定する旧軍人の考えの背後にある、女性を「もの」として考える意識があった(吉見, 1995)など、「慰安婦」問題において、性的行為の合理化が起きていたことが示唆される。

こうした男性による性的行為の合理化意識は「レイプ神話」(Burt, 1980)と呼ばれ、「加害者を免責し、被害者の責任を問うものである」と定義されている。レイプ神話が「慰安婦」問題に内在しているのなら、それにより歴史的事実の態度や知識が妨げられ、「慰安婦」問題が未だ解決されない要因となっているのではないかと予想される。

そこで、本研究では「慰安婦」問題に関する態度や知識を明らかにするとともに、レイプ神話がどれほど支持されているかを検討し、これらの関連性を明らかにする。

【方法】 東京都内の私立4年生大学の学生計150名(男性73名, 女性76名, 不明1名, 平均年齢20.9歳, $SD=1.8$)を対象に、倫理的配慮のもと質問紙調査を行った。質問項目には、i)性別, 年齢 ii) 「慰安婦」問題に関する尺度(北風, 2008): 知識を問うもの, 4項目2件法。iii) 「慰安婦」問題に関する尺度(北風, 2008): 態度を問うもの, 4項目6件法。iv) レイプ神話尺度(大淵, 石毛, 山入, 井上, 1985): 「暴力的性の容認」「女性の被強姦願望」「女性のスキ」「ねつ造」といった女性の条件に焦点が当てられている4つの神話を取り上げたもの, 20項目5件法である。

【結果】

(1) レイプ神話の支持率と回答傾向

レイプ神話の支持率と回答傾向を評定法で求めたところ、暴力的性の容認の項目では、表現の仕方によって支持率に差があり、被強姦願望では、男性のほうが、無理やりセックスすることを正当化する傾向があった。女性のスキでは、女性のほうが支持する傾向があり、ねつ造では、男女とも10%弱で支持する傾向にあった。

(2) 「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係

「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係を求めたところ、「慰安婦」問題に関する態度とレイプ神話の合計得点との間に負の相関が見られた($r=-.22, p<.01$)。態度とねつ造との間に負の相関が見られた($r=-.19, p<.05$)。また、「慰安婦」問題に関する態度と知識との間に正の相関が見られた($r=.58, p<.01$)。したがって、「慰安婦」問題に関して、許されることではないと考える人はレイプ神話尺度の得点が低いことが明らかになった。また、「慰安婦」問題に関して正しい知識を身に付けている人は、「慰安婦」問題を許してはいけないと考える傾向があることが明らかになった。さらに、男女別で相関関係を求めたところ、男性は「慰安婦」問題とレイプ神話の相関が見られず、女性は「慰安婦」問題に関する認識とレイプ神話に負の相関が見られた。

【考察】

(1) レイプ神話の支持率と回答傾向

女性のスキの支持率では、男性より女性のほうが2倍以上高かった。これは、女性のほうが自ら誘いにのって無理やりセックスされても仕方がない、自分の責任だと考える傾向にあると考えられる。スキがあったと被害に遭った自分を責めることで、さらに自分を傷つけ、二次被害が起きる。この二次被害を防ぐためにも、被害者のケアと同時に、周囲の人々に対する教育的介入も必要不可欠となる。また、「強姦された女性は魅力がなくなる」の項目では、女性より男性のほうが支持する傾向にあった。抵抗できなかった可能性があるにも関わらず、強姦されたために魅力がなくなるという考えを抱くことは、被害者に対する偏見である。偏見を予防するためにも、レイプに関する教育的介入が必要不可欠となる。

(2) 「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係

レイプ神話の支持度は慰安婦問題に関する態度に直結する可能性があるが、正確な知識を持てるか否かには影響せず、正確な知識の保有は独立した要素であると考えられる。「慰安婦」問題に関する態度と知識の関連性の分析では、これらに強い相関関係があることが明らかになった。正確な知識を有しているほど、「慰安婦」に関する理解が深まり、被害者への偏見も予防することができると考えられる。レイプ神話と「慰安婦」問題に関する知識には関連がないため、教育的介入は独立して必要であり、また効果もあると推測できる。

(3) 性差における「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係

男性における「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係を見たところ、レイプ神話の合計得点は、「慰安婦」問題に関する知識と態度に有意な関係を示さなかった($r=.01, r=.09$)。そのため、男性は正常時におけるレイプと異常時におけるレイプは違ったものだと考える傾向がある。例えば、「戦争中におけるレイプは仕方がないが、日常におけるレイプは許されない」と思い、戦時中におけるレイプを容認していると考えられる。したがって、男性に対してレイプに対する教育的介入を行うと同時に、独立して「慰安婦」問題に関する教育的介入が効果的であると推測できる。女性における「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係を見たところ、レイプ神話の合計得点と「慰安婦」問題に関する態度との間に負の相関が見られた($r=-.36, p<.01$)。レイプ神話の合計点が高い、つまり支持しているほど、「慰安婦」問題の態度の合計点が低い、つまり、「慰安婦」を許容する傾向が弱かった。したがって、女性は正常時におけるレイプと異常におけるレイプを同じことと捉え、レイプ神話が「慰安婦」問題に内在していることが考えられる。このことから、女性は正常時のレイプも異常時のレイプも同じほど辛く耐えがたいと思っていると推測できる。

【引用文献】

北風菜穂子 2008 日本の大学生のレイプ神話受容態度と変容に関する臨床心理学的研究 明治学院大学大学院心理学研究科 修士論文 未公開
大淵憲一 石毛博 山入端津由 井上和子 1985 レイプ神話と性犯罪 犯罪心理学研究, 23, 2, 1-12
(なかのまき・いとうたけひこ・いのうえたかよ)